

# 日本記者クラブ会報

第164号  
1983年  
10月10日発行

東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一  
プレスセンタービル9F 電話100  
◎ 社団法人 日本記者クラブ  
電話 五〇三―二七二一(代)

## 「研究会」いづれも好評

### 時宜を得た企画で毎回盛況

七、八月に新たにスタートした四つのシリーズ研究会がいづれも好評である。

九月末までに、「ソ連・その実態と意図」、「減税問題」がそれぞれ三回、「軍事技術」が二回、「世界経済の課題」が一回開かれたが、各講

師とも入念な準備をされており、内容的にも充実している、と会員の評判は高い。参加者総数も六百四十八人、一回平均六十八人。この種の研究会の参加者は、過去三年の記録をみると平均五十人弱なので、相当な盛況といえる。企画委員会で、現場

を見た後、いぜんとして確定的な返答がない。

## 米大統領に「会見開催」を再度要請

今秋訪日する国、公賓のうちコロンビア西独首相が十一月はじめ、胡耀邦中国共産党総書記が同月末の日程で、日本記者クラブでの記者会見がほぼ実現しそである。しかし、レーガン米大統領の会見については、九月初旬に第二先遣隊が来日

したため、九月二十日付新井理事長名文書で、レーガン大統領にあて、日本記者クラブにおける記者会見の実現について再度要請を行った。

のクラブ詰め記者などワーキング・プレスにも参加を呼びかけよう、という事になり、手作りのポスターを用意したことも一因。それに加えて、たまたま大韓航空機撃墜という大事件にぶつかったため、「ソ連」と「軍事技術」の両研究会が時宜を得たテーマとなったのも大きな要因である。

「減税問題」はあと一、二回で終わる予定だが、他のシリーズは月一回のペースで当分続けられる。新たに始まる軟派シリーズ「手のつけられない問題」(八面参照)も、十月二十七日(木)に『覚醒剤』をテーマに第一回が開かれる。

さらに多数の参加と活発な質疑が期待されている。

### クラブ施設の利用方法

#### 再検討へ 施設運営委

第二回施設運営委員会は九月二十七日開催され、クラブ施設の利用方

法について実質的な検討に入った。

昭和五十一年クラブがプレスセンタービルに移転した際、小委員会を設置してクラブの利用方法などの一般的なルールを決めた。これが「クラブ利用に関するお願い」という小冊子にまとめられ、全会員に配布された。現在、この「ルールブック」に従って貸室の利用、食事の予約・変更、ポトルキーブなど日常的な事項が処理されている。しかし、移転後七年が経過し、クラブ会員も問もなく二千人を超えることが確実といった状況の変化に伴い、内容の再検討が迫られていた。

委員会は、年内をめどに改定案を作成し、理事会に報告、承認を求め、明年早い時期に改定版『クラブ利用に関するお願い』を刊行したいとしている。

### 十月一日現在の会員状況

法人会員	一四四社
基本会員	六二九人
個人会員	一、〇九五
法人・個人賛助会員	五八社
特別賛助会員	一七四人
名誉会員	七四人
計	二〇二社 一、九八四人

## とっておきの話

## 運にまつわるくだらぬ話

佐藤 達郎

とっておき、なんて気の利いた話の持ち合わせはない。あればどこかに書いてあるし、さしさわりのある話はまだ書けない。結局、自分史の中からタネを拾って責めを果たす。

運命論者ではないけれど、現在の日本が世界一の長寿国になったのは、乳幼児の死亡率低下もあるが、明治・大正の高齢者が延々と生きのびていることにも大きな要因がある。

いかなれば戦前、戦後の困難を通じて生きぬいてきた運の良い連中が多かったからこそ、日本が今日の奇跡的立ち直りを成しえたともいえよう。小生などこうした国家への貢献度においてはとてもそ

の中には入らないが、悪運の強さで長寿年齢には一役かったと自負している。

六歳のとき父について東京から昔の関東州、大連に渡った。船中で関東大震災をきき東京が丸焼けになったと知って、子供心に運がいいなと思った、これがはじまり。

昭和十六年に学校を出て満州の新京に赴任した。身体頑健のゆえか直ちにソ・満・鮮国境の街、図們から北の佳木斯へ向かう鉄路に沿った寒村に派遣された。セメント工場建設の仕事だったが、日本人は工事関係者を含めて三十人足らずで、あとは百名ほどの鮮・満労働者(苦力)がアンペラ小屋に住み働いていた。

着任したその夜、匪賊の襲撃をう

けた。幅二十メートルほどの河を建てようとしていたわけだが、これを妨害するため橋を渡って苦力を奪いにやってくるのだ。首領は金日成で副将が崔顯。金は説得して連れ去るだけだが、崔はいうことをきかぬと殺すとか。翌晩から新入社員七人が交替で銃をもち橋のたもとで歩哨に立った。——十年前、北朝鮮を訪問して金主席と会食した際、貴方があのときの首領かときいたら、直接は答えず崔顯は副首相で元氣でいるよと笑っていた。

十二月八日に太平洋戦争がぼっ発。十二月末に約八か月を無事にすごして入営のため帰京、十七年一月に赤坂の歩兵一連隊に入った。一期の検閲がすみ、外地派遣先が発表されて小生は中支軍とのこと、ところが翌日、行き先変更で満州という。理由は同姓同名がいての間違い。満州から帰ったばかりといったが通

りはしない。中支組はわれわれが在営中に出発していったが、数日後に全員が白木の小箱で還ってきた。同姓同名君も勿論その中に入っていた。輸送船が撃沈されたのだ。

四月某日の深夜、営庭に集合、桜がハラハラと散っていた。品川まで黙々と行軍、カーテンを下ろした汽車で西下、関釜連絡船で朝鮮半島、そして北上を続けて北満の国境、黒龍江をはさみブラゴエスチェンスクに対峙する黒河の後方陣地の部隊についた。半年ほどたつと幹部候補生の試験があり、十月、すでに白皚々の北満をあとに帰国、豊橋の子備士官学校に入った。翌十八年の五月まで演習以外は外出禁止。そして五月卒業の命令をきいて驚いた。「〇〇候補生以下〇〇名五月五日付をもって豊橋予備士官学校を卒業、退校を命ず、即日、見習士官に任じ、即日、予備役編入、即日、召集、直ちに原隊復帰を命ず」順序は若干違っているかもしれないが、とにかくフィルムの手送りのように自分の



十三相殿  
役、今年六  
月から顧問  
に。現在、  
内外情勢調  
査会顧問を  
兼務。

さとう たつろう氏略歴 大正六年東京都生まれ。六七歳。早稲田大学卒。昭和二十二年時事通信入社。三十二年政治部長、三十八年ニューヨーク支局長、三十九年ワシントン支局長をそれぞれ務める。帰国後、松山支社長、福岡支社長を経て、四十六年代表取締役社長に就任。五

運命がバタバタと決められていくのを凝視していた。そして再び原隊へ。  
支那や南方での戦闘は日ごとに激しさを加えていったが、ソ満国境は中立条約もあり、緊張の中にも平静を保っていた。演習に明け暮れる単調な日々の中に、航空見習士官の募集があった。新京で試験をして合格すれば歩兵から航空兵へ転科させるというので、応募したら順調にいったが最後の視力検査にひっかかった。例のカナヤ符号の判読だが、〇・三ではみえるはずがない。係官は軍曹で気の毒そうに「残念ながら」といった。こっちは階級が上の見習士官

だ「一・二と書いてくれ」とおどしたりすかしたりして突破したが、腫孔検査が軍医大尉。「こんな視力では勤まらん。どこにおつても御奉公は同じ」と落第。

ふたたび北満へ帰った。南方の戦線は拡大し仲間の見習士官は相次いで支那へ南へと転属していったが小生にはなんの命令もこない。調べてみると航空要員受験のときのやりとりが手違いで、小生は航空見習士官要員になっていたので。このため転出もさせられないし、実際はオチているんだから航空隊に行くこともない。そのうち少尉に任官し、将校が足りないせいもあって大隊副官、中隊長となる。戦後、レイテ、沖繩の戦記を読むと、壮烈な戦死者の中に多くの友の名を見出し、運命のいたずらを思った。

戦局はいよいよわれに不利、部隊は南方転進のため二十年五月、暗夜に乗じて貨車数十両をつらねて南下した。一般人、開拓者などは置きざりである。釜山から北九州に上陸したが、それから先の輸送力はすでない。立花山のふもとや志賀ノ島で、

米軍との本土決戦にそなえ穴掘りをしてる間に終戦を迎えた。

二十一年に復員、記者生活に入る。東京の実家は焼滅、両親は熊本に疎開中、間借りで仕事と買い出しに忙しかった。軍隊での四年のプランクをとり戻そうにも、食べる手当が先に立つ。能力はなくても金と田舎に実家のある奴は、三倍は得をしているとハラが立った。三倍の根拠は別ないが、その点で運のよかった連中は生き残り組にけっこう多い。

記者運には恵まれたと思う。戦後の新円封鎖、集中排除、傾斜生産といった経済再建への足どりや、占領から独立回復への政治の歩みもみてこれたし、東京を離れたときは、北海道で洞爺丸沈没事件、松山でYS11の墜落事故、福岡ではよど号ハイジャック、そしてアメリカではケネディ暗殺、利子平衡税など行くところ事件ありだった。しかし、記者運の方はわが身はご安泰で人の不幸に乗っているようなものだから除いた方がいいかもしれない。

もともと松山のYS11事件はわが

身の運にも強くかわっていた。東京で会議があつて、帰任はあの墜落機の手定めでいた。ところが庶務が一便早いのをとったため、難を免れたばかりか、大安吉日で新婚さんが多かったこと、次の便の到着おくれの異状などの情報をキヤッチできた。悪運強しと感嘆久しくする友人もいた。

余談だが、この遭難のニュースが全国に伝えられたとき、いち早く銀座のさるバーのママが松山に電話をくれた。前夜、その店で飲んだ際、帰る便をしゃべったらしい。受話器をとって「ハイ」と答えると「よかった。忙しいでしょう。頑張つて下さい」といって切った。リップだと感心した。それにひきかえ、本社の友人Kは「君の彼女が亡くなったんだって、ご愁傷さま」と電話してきた。小生のマンションの下に住むバーのママが遭難したのは事実で、これを別の友人Hが邪推か、冗談でもいったのを真にうけたらしい。行数も埋まったようだ、失礼。

# 日教組プレハブ大会

ワーキングプレス

それは異様な光景だった。午前六時すぎ、朝もやの中を先生の集団が行進した。その周囲をジュラルミンの盾を構えた機動隊員ががちりガードして進む。

宿舎から会場まで約一キロ。無言の行。ユース沿いの民家は玄関や窓に板を打ちつけ、騒ぎに備えた。不意打ちをくらった右翼団体は会場の道路に押しかけたが、あとの祭り。そこには機動隊のバリケードが二重、三重に……。『きたねえぞ』の右翼の怒号の中を、先生たちは厳重なチェックを受け、ピリピリした表情で会場に入った。

八月三十日。右翼の行動を封じた(街頭宣伝は県条例で午前七時以降)警察・日教組の「睚作戦」で大会は始まった。

今年の日教組大会は岡山県真庭郡湯原町で開かれた。岡山市から北へ車で二時間半。中国山地の静かな山合いのいで湯の町である。人口約四千五百人。町の中央を流れる旭川沿いに三十三軒の旅館(湯原温泉)美作三

湯の一つ)が軒を連ね、国指定の天然記念物「オオサンショウウオ」で知られる。その町はずれの空地にプレハブ会場が急造され、町に『あらし』がやってきた。私たち取材班が現地入りしたのは大会の一週間前。そこはすでに『戦場』だった。幾台もの右翼街宣車が狭い路地裏にまで入り込み、終日ボリュームいっばいに軍歌を流し、がなりたてていた。大声をあげれば端から端に届く温泉街である。二、三十台の街宣車から無差別に発せら

## 異様な光景を

## 生んだものは何か

刈田 昌

(山陽新聞社 社会部)

れる八〇〜九〇ホンの『騒音』が、耳に突きささるのだからたまらない。住民は『音の暴力』に疲れ切っていた。

大会開催(八月三十日〜九月二日)がどうしても避けられないと知って、町民は『自衛』に踏み切った。学校は二学期の始業を延期し、町営の診療所は閉鎖した。商店は「商売にならん」と店を閉め、年寄りや病人、子供のいる家庭の中には「殺される」と親せきに『一時疎開』する家も出た。

町は『外人部隊』に占領された。ピーク時、町内には右翼関係千百人(街宣車二百六十台)、日教組関係千三百人、警備関係三千人、報道関係三百人……が詰めかけた。住民は家に閉じこもり、声をひそめて『あらし』の過ぎるのをじっと待った。

「湯原大会」は多くの問題を残したまま終わった。日教組は岡山県出身の槇枝元文委員長の「引退の花道を」と、地元での大会開催を計画。これを知った右翼団体が「大会阻止と公共施設の貸与反対」の陳情、請願を岡山県、岡山市議会に提出、両議会が賛成多数で採択した。

これを受ける形で行政当局も、日教組の「公共施設を会場に」の使用願いを承諾し、「混乱が予想される」と断った。日教組は「民主主義(集会の自由)を守る戦い」と岡山県内での開催に固執、湯原町にプレハブ会場を仮設して開催にこぎつけた。

この過程には「理念と現実」のギャップがいくつもある。その疑問は現地をみて、住民と話して、いっそう増幅された。住民は、右翼の横暴(とりわけ音の暴力)に怒り、軽犯罪法の適用しかない取り締まりに歯がしりした。一部マスコミの無

責任ともとれる『過剰報道』に反発し、町内に大会賛成派と反対派の亀裂を生んだ。そして「無抵抗な住民を犠牲にして民主主義があるのか」と日教組、行政当局に対する不信感をつのらせた。

あらしが去って一か月。町は表面上は静けさを取り戻したが、後遺症(不信感としこり)はまだいえない。町民は今「あの苦しみは湯原町民だけだった」と、痛めつけられた『音の暴力』を規制する条例を求め、署名運動を進めている。



温泉街の宿泊所から機動隊員にガードされて会場に向かう日教組代議員ら(8月30日)

# 大韓航空機墜撃事件

ワーキングプレス

そろそろ昼食に出かけようと支局のいすから立ち上がりかけた途端、電話が鳴った。友人の韓国人記者の興奮した声。「大韓航空機事件は振り出しに戻った。盧載源（外務次官）の会見がこれからある」。

韓国人記者や親しい友人が、重要情報を電話で私に知らせてくるのはよほどのことだ。電話はどこかで聞かれているかもしれない。政府機関はもとより韓国のマスコミの間にも、「日本人記者は敵だ」といった感情はなお根強く残っている。日本人記者と親しいことが、白い目でみられても出世の助けになることはまずない。「日本人記者は韓国の悪口しか書かない。北に好意的だ」との感情が、固定観念になっっている。そんな事情を無視して、私に思い切って電話をしてくれた、この韓国人記者には感謝の他ない。韓国人の助手を使って日本語でしか取材しない態度も、日本人特派員の韓国報道に不信と反発を生む原因になつてきたが、それに加え日本人特派員のはまりやすい落とし穴は、韓国社会における「うわさ」

の意味に正確な認識を持たず、それをすぐ記事にしてしまう悪習である。「ソウルへ送られるのは三流記者ではないか」と、日本の新聞人の取材力に対する不信感を耳にしたこともまれでない。

ソウルは、うわさの先行する街である。報道規制への「被害者意識」と「情報飢餓心理」が常に幾つかのうわさを街の中に漂わせている。このうわさだけを集めても、興味あるシニカルな記事がすぐで上がる。友人の韓国人記者は、「う

## うわさが生んだ

### 「強制着陸」

重村 智計

（毎日新聞社 ソウル特派員）

うわさを情報と考えるのは評論家に過ぎない。確認する作業をするから新聞記者だ。最低三か所に確認することです」と、ソウルでの取材の基本を何回となく語ってくれた。

大韓航空（KAL）機墜撃事件の起きた九月一日は、うわさが一人歩きし、そのうわさに日韓のジャーナリズムが共に手玉にとられた痛恨の記念日である。

当日のソウルは情報不足にいらだち通しだった。大韓航空の事故対策本部が金浦空港三階に設けられたのは午前十時近

くになってからだだった。金浦空港で朝六時から事故機の到着を待ち受けた出迎える家族や関係者は、わけのわからないまま放つたらかされた。KALの職員がようやく応接に現れたのは午前十時近くである。乗客家族は一斉にKALの対応の悪さと情報のなさをなじる。弱り果てたKAL職員が、「サハリンに着陸したとの情報もある」と伝えた。家族の不安を柔げようとしてもらった一言が、「情報飢餓心理」と無事への期待感情の相乗作用で「サハリン強制着陸」を作り出していった。

午前十時半、朝から同じニュースを流し続けていたソウルのKBSテレビが突然「未確認情報ですが、KAL機がサハリンに強制着陸させられた」と何回となく繰り返した。この直後に取材先のテレビ記者の声がかたまり「政府筋が、米CIA（中央情報局）情報としてサハリン強制着陸を明らかにした」と断定的に報道した。

原稿を東京に送稿したあとで外務省関係者に電話を入れると「強制着陸はまだ確認していない」という。この間にもテレビ・ラジオ局はサハリンの強制着陸を伝え「大韓航空の趙副社長が、救援機で北海道に向かいサハリン入りする」と報じた。「うわさ」は「情報」となり、

「情報」は「事実」へとまたたくまに格上げされて行った。私たち日本人記者もその変質過程に巻き込まれた。東京でもこれと並行して同じ現象が生じたらしい。実際には「事実」を構成したのは未確認の「情報」に過ぎず、その「情報」の根っこは「うわさ」だった。それが自然発生したものか、誰か個人のものであるかは、いまは組織的な工作によるものかは、いままなお確かめられていない。

韓国中が「サハリン強制着陸」に安んずる胸をなで下ろしたさ中の午後零時四十分、盧載源外務次官が外務省記者室に現れた。同次官は「強制着陸は全く確認していない。KAL機はなお行方不明」と短く語ると記者室をあとにした。夕刊紙の記者が一斉に電話に飛びつく。夕刊各紙の輪転機が「KAL機サハリン強制着陸」の大見出しを刷り上げた紙面を抱えたまま一斉に止まった。

「また振り出しに戻ったのか」と私の質問に、外務省スポークスマンをはじめ当局者は「その通りだ」と力なく肩を落とした。

# 先月のクラブゲスト

P・ハートリング国連難民高等弁務官



六八年  
と七一年  
デンマー  
ク外相、  
七三年  
七五年同

首相。それ以前には牧師職と教職の経歴も。七七年から現職。先進国の失業増加で、難民受け入れが順調に進まないのが悩み。【五日(月) 記者会見 司会 石丸和人企画委員 通訳 米倉淑子 出席 一九人】

授 袴田茂樹 青山学院大学助教



六七年から五年間、モスクワ大学の大学院で学ぶ。ロシア人の心理構造や意識構造を通して、ソ連の政治、経済、

社会を研究している。個人と社会に関して、理念型として、ヨーロッパ人を

石 弘光 一橋大学教授



三〇年代、四〇年代にはほとんど毎年物価調整減税が行われた。五三年から六年間、それが

石ころ、日本人を粘土、ロシア人を砂にたとえる。バラバラな砂は外から枠をあてがわれないと形にならない。計画経済の国の人々は集団主義的でなく個人主義的、しかも独立性と社会性を持つ西欧近代の「個人」ではなく、「私人主義」と呼ぶべきものだという。経済や社会の活性化のためには官僚主義、形式主義を排除し、個人や社会の自律性を伸ばさなくてはならない。しかし、ハンガリーの権力と民衆の間にあるような信頼に基づく契約の観念が、ソ連にはない。ソ連社会にはアナキーへの傾斜とそれへの恐れが常に潜在しており、進んで規律を求める傾向も根強いので、この二つの矛盾を同時に解決するのは至難と結論づける。【二四日(水) 研究会「ソ連—その実態と意図」(II) 司会 森本良男企画委員 出席 六五人】

行われず、サラリーマンの不公平感も強い。そこで「一兆円規模の所得税減税は必要」と主張する。累積赤字と共存しなくてはならない財政の中で、今後は歳出、歳入両面それぞれでのスクラップ・アンド・ビルドを考へるべきで、歳出を削って減税財源に回すべきではないとする。財源は税制改革によって捻出すべきで、所得税減税を機に、わが国に合った課税の公平を確保するため、本格的な税体系の見直しをすべきだという。【二〇日(火) 研究会「減税問題」(III) 司会 広瀬一郎企画委員 出席 四二人】

上原祥雄 防衛庁装備局開発計画官



三〇年代、四〇年代にはほとんど毎年物価調整減税が行われた。五三年から六年間、それが

ミサイルの発想の起源から、その技術の変遷と発展の経緯、主要な戦術、戦略ミサイルの性能や特徴、今後の発展動向まで、まさしくタイトル通り「ミサイルのすべて」。オーバーヘッドプロジェクトを使うて、たっぶり二時間の講演。上原氏は、いわばわが国におけるミサイル研究の第一人者。

エグゼクティブをしのぐという国産ミサイルASM1の開発にも主導的役割を果たした。講演後、そのASM1ミサイルの実射試験のフィルムも上映された。【二日(水) 研究会「軍事技術」(II) 司会 武藤慧企画委員 出席 八七人】

矢田次夫 前統合幕僚会議議長



統幕議長時代から歯に衣させぬ率直な発言。制服を脱いでますます盛ん。

「シーレーンとソ連の脅威」のテーマで、予定を超えて一時間半。領域を守るといふことと継戦ルートがなくなっていくことは、防衛にならないとして、海上交通路防衛の重要性を説き、それが可能とし、具体論を展開する。「日本の船の安全を守れば、結果としてそのエリアの米第七艦隊や原潜の自由を確保出来、西側の連帯にも……」。【二七日(火) 研究会「ソ連—その実態と意図」(III) 司会 水野堯企画委員 出席 九〇人】

# 東京支社訪問

福井新聞

きびしかった残暑もどうやら去った。福井新聞東京支社のある銀座五丁目。通りを行く人にも背広姿が多くなった。

話をうかがったのは、東京在勤のベニ〇年の菊池智支社長と、今年二年目の宮本浩次編集部長のお二人。

「福井の人はテレビ屋が多い。それでよく誤解されるんですが、意外と新しいもの好きでハデ好き、単に内向的なわけではない。付和雷同はしません」と菊池会員は福井県人気質を語る。

東京支社は両氏を含めて七人。編集は宮本会員ひとり。「とにかく忙しい」ことになる。そのうえ、本社での編集会議に出席するため、月に二、三回は福井に帰らなければならぬ。「その都度東京からの手土産用「ニュース」(?)を持っていかねければならないですよ」

福井県は原発県とも呼ばれるほど原子力発電所の多いところ。現在、高浜、敦賀をはじめ九基が稼働、四基が建設準備中。また、良質の米作地であり、合成繊維や絹織物などの繊維産業も発達している。さらに北陸新幹線の計画もある。

このように中央の政治との係りあいが強い問題が多い。そこで、地元の人々にとって必要な情報を、まるで小さな穴をひとつひとつ埋めていくように、丹念にカバーするのが東京支社の仕事となる。

## 「ルーツ探し」から

## 「産婆役」まで

福井新聞の大きな特色のひとつに六五%という高い普及率がある。その影響力の強さを「改めて感じることもある」と宮本会員はこんなエピソードを紹介してくれた。

ある日、年輩の婦人が支社を訪れた。ルーツを探してほしいというのだ。話を聞くと、その婦人の亡くなったおじいさんが福井から養子として東京に来たのだが、死の直前しきりに故郷へ帰りたいがっていた。自分

も年を経て、今はその気持ちがよく分かるので縁者がいればぜひ会いたいのだが、おじいさんは養子だったため姓が変わっており、その出身地も定かでない、という相談だ。

「そこでこの話を十五行ほどの記事にしたんです。すると、すぐに親類の方が現れましてネ」と宮本会員は満足度百%の表情。

ところで福井新聞では昨年七月、福井出身の在京洋画家と地元の洋画

愛好家との「流派を超えた」展覧会『福井現代洋画家展』を主催した。東京支社が画家との交渉等に当たった。画家は自

分のスタイルに強く執着するので、同県人でも横のつながりはほとんどなかったという。「これだけ異なった流派の人たちの作品が集められたのは珍しいんですよ」と菊池会員はその時の苦勞を語りながら、パンフレットを見せてくれた。なるほど、具象から抽象までさまざまである。菊池会員はまた在京県人会と支社の係わりを話す。

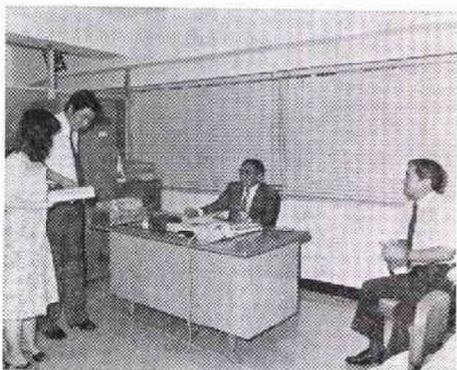
ご多分にもれず、福井県の場合も

若い人の県人会離れが目立っていた。けれども数年前、若い人の間で県人会の青年部を作ろうという話が表面化した。それが東京支社に持ち込まれ、いわば支社が「産婆役」をつとめた格好で福井県人会青年部が誕生した。最近では、さらに若い学生の間で同じような動きがあり、現在その相談にもなっているという。

「こうした諸活動の充実があって、そこから生々とした記事が生まれ、紙面が活性化されることにつながるんですよ」と宮本会員はいう。

福井新聞は来年八月、八五周年を迎える。現在その記念企画を練っているところだ。

(河野)



右から宮本会員・菊池会員 (9月14日)

数年ぶりに結婚式の媒酌を依頼された。あまり考えもせず簡単に引き受けたら、さる新婚の若夫婦から、「先生、近ごろの結婚式では、お仲人さんもお色直しをやるんですよ」といわれ、ビックリ仰天した。

「派手になったネ、最近は…。全く手がつけれない」と夫婦で慨嘆した。わが家にはモーニングが一着あるだけなのだ。

「手のつけられない問題」の研究会はこの辺が発想の原点なのだが、現在、世界には手のつけられない問題が三つあり、それは、①ソ連の軍備②アメリカの高金利③日本の輸出だという。しかしこういったものは他の研究会でフォロー可能なので、当方は社会ダネ一本にしぼってテーマを選択することにした。

社会面のニュースやトピックを構成する大道具やその舞台裏を、専門家からじっくり解説してもら

研究会

手のつけられない問題

い、手におえない問題の報道・評論に対して、若干でもお役に立てば……と思っている。目下のところは、覚醒剤、SEX産業、校内暴力、金権選挙、広域暴力団、サラ金禍、異常気象、スポーツ選手の低年齢化、冠婚葬祭フィーバー、離婚等が候補である。他の硬派シリーズ研究会に比べやや格調が落ちる。つまり、軟派路線である。

石山 四郎

その代わり、会員同士が気軽に意見交換ができ、これが親ぼく増進の場となることにも配慮し、あわせて藤村企画委員長からの要望

——会員のご家族も出席されるような研究会にしたいものだと願望している。

その意味ではこの研究会は、フォーマルな研究シリーズのデザート……、お色直しの症候群ともいえる。

担当委員は友田(サンケイ)、藤川(日本テレビ)、中沢(D)と私。

第104回企画委員会

昭和58年9月8日(木)  
日本記者クラブ大会議室

七月、八月のクラブ行事について、司会をした各委員から報告があり、引き続き事務局から九月の予定と今秋来日予定のレーガン米大統領、コール西ドイツ首相、胡耀邦中国共産党総書記らの会見の可能性について中間報告が行われた。

「ソ連」、「軍事技術」、「減税問題」、「世界経済の課題」の四シリーズ研究会の九月、十月のテーマと講師について、各幹事から報告があり、これを了承した。

出席 本島、伊藤、森本、一木、友田、広瀬、平田、有賀、水野、藤川、武藤、永町、河野、有馬、中沢の各委員。

第44回会報委員会

昭和58年9月14日(水)  
日本記者クラブ小会議室

八月号と九月号について意見交換の後、十月号の編集方針について協議した。『ワーキングプレス』は、佐藤達郎氏、墜事件、と日教組プレハブ大会に決め

た。また、『東京支社訪問』は福井新聞社を訪ねることにした。  
出席 深谷委員長、井出、斎藤、安延の各委員。

第74回会員資格委員会

昭和58年9月16日(金)  
日本記者クラブ小会議室

十月一日付の入退会を審議し、理事会に答申した。

出席 水上委員長。細川、赤松、滝沢、吉田、亀山、内藤、山同、埜色の各委員。

第2回施設運営委員会

昭和58年9月27日(火)  
日本記者クラブ小会議室

会員のクラブ利用ハンドブック「クラブ利用に関するお願い」の改定について意見を交換した。

出席 小林委員長。梅本、宮地、山崎の各委員。

〔理事変更〕

読売新聞社

「新」水上健也(常務取締役編集局長)

「旧」加藤祥二

西日本新聞社

「新」滝口凡夫(編集局長)

「旧」宮田弘司

日本新聞協会

「新」山田年栄(理事・事務局長)

「旧」江尻進



▼「金融がわかる本」(ダイヤモンド社)を、夏休み返上で書き上げ、現在印刷中です。

たとえばマネーフ

ローとかマネーサプライが日本経済だけでなく、私たちの毎日の生活ともどんなに深いかわりをもっているのか、金融の本質を身近にやさしくとらえることに執筆の力点をおきました。

十一月中旬全国一斉発売の予定ですが、私にとってちょうど十冊目の著書になります。

個人D 今 静行

# 紹介 会合

1日▽ニューメディア専門研究会(協会田所泉会員)▽官邸付属会—東京高等師範卒の官邸クラブ記者、次官、秘書官の集まり(NHK)

上田隆郎(会員)▽日本プレスセンタービル七周年パーティー(前田雄二(会員))

3日▽座談会「農畜産物自由化問題」宇沢弘文(東大教授、樋口恵子(評論家)他三名(日本農業 今岡昇(会員))

7日▽対談「大韓航空機撃墜事件」青木日出雄氏と竹田五郎元自衛隊幕僚長(東

亜日報 韓甲洙(会員) 8日▽日米記者交換計画セッション「日本の先端技術の将来」(堀井一博(新世代コンピュータ技術開発機構理事・研究所長)「日本の政治」(村田聖明(サイマル顧問(協会) 阪田秀(会員))

9日▽JNN報道部長会、懇親会(TBS 太田浩(会員)) 14日▽デフィノス北海道(夕張)創立発表—「北欧の有名ブランド「デフィノス」のラグ(敷物)生産工場を、夕張市の再建のため同地に設立する(道新 太田俊郎(会員))

19日▽情報化社会シンポジウム(レセプション(民放連 野崎茂(会員)) 22日▽サンケイ政治部記者OB会(今井久夫(会員))

ター事務室(五八〇)九五五八まで。

日本プレスセンター 桜井孝児

●田暮の会●

九月例会は二十四日。秋分の日と日曜日の谷間で、しかも朝から雨模様とあつて出足が危ぶまれたが、二十三名が参加、総対局数四十六局と、いずれも今年の最高を記録した。

当初用意された碁盤は八面だったが増設につぐ増設で、結局十一面に。会場の大会議室は、二か月ぶりの手談と舌戦でなごやかにしてにぎやかな雰囲気につつまれた。成績優秀者は次のとおり。

▽NRRN技術運行会議(ニッポン放送 佐久間寛夫(会員)) 26日▽「ペンは剣よりも」出版記念会(坂田二郎(会員)) 28日▽創立三十五周年記念祝賀会(水産経済 山口和子(会員))▽レジャー記者クラブ例会(毎日 白根邦男(会員)) 29日▽民報協記者研修会—講師 渡辺美智雄(元大蔵大臣)『ロッキード判決の結果と総選挙』末広重二(気象庁長官)『地震予知と防災』他(NTV 三箇和彦(会員)) 30日▽飛鳥田さんをねぎらう会(田原洋(会員))

(九月の主な会合です。総回数は一〇四回でした。カッコ内は申し込み会員名。)



坂田会員の著書『ペンは剣よりも』の出版を祝う

堀川敏雄五段(D)、伊藤光彦五段(毎日)、村上重美三段(事務局)、斎藤吉史初段(D)。この結果、斎藤初段は規定に より二段に昇段。

なお、今月の初参加は伊藤五段と橋本正邦五段(協会)のお二人でした。

次回は十一月五日(土)午後一時から。初めての方も遠慮なくどうぞ!



# プロフィール

十月一日付人会の個人ID会員、法人・個人賛助会員、特別賛助会員の方がたです。

## ◇会員証と取材証について

会員証は写真付です。取材証(ピンク)には新聞、通信、放送各社の社名だけが書かれています。

会員証はいわばオールマイティーです。これによってクラブのバー、レストランなどの諸施設が利用出来ます。また、クラブが主催する昼・夕食会、記者会見、研究会、見学会等に参加される際は、これがIDになります。会合の時は受付でケースをお渡しして、胸につけていただいています。

取材証では原則として、ラウンジ、レストラン等の施設利用は出来ません。これはプレス会員社の社員で、当クラブ会員に登録されていない方がたが、クラブ主催の昼・夕食会、記者会見、研究会に出席する場合のIDです。そのため、三年毎に更新し、プレス法人各社に、管理責任者を登録していただき、法人の責任で保管、運用に当たっていただいております。各社の取材証の枚数は、基本会員の数と同じです。

したがって、会員の方には、取材証は不要です。主として出先クラブづめの非会員の記者やたまたま本社から上京してきている地方紙、地方局の非会員の編集・報道関係の方がたに使用していただくものです。

特に最近では企画委員会の努力で、充実したシリーズ研究会が行われていますので、各社ともこの取材証を有効にご利用

いただきたいと思います。

#### ◇会費の請求について

会費を個人で負担しているA、B、C会員とD会員、特別賛助会員の方がたについては、三か月分前納という会費規則に基づき、三か月毎に請求書を送りしています。

ただし、中には「つい忘れてしまっから……」とおっしゃって、半年、一年単位で請求書を出してほしいという方もいらっしゃいます。そうしたご希望にはもちろん喜んで応じていますので、会計の齋藤（五〇三）二七二一までご連絡いただければ幸いです。

また、最近では会費をご持参いただくケースがふえています。その際も出来るだけ振り込み用紙をお持ちいただくようご協力願います。何月分会費かが、それによってすぐわかりますので、お待たせせずにお待ち願います。会計は午後五時半まで執務しております。

#### ◇映画の試写券について

クラブの試写会は、いつも盛況で、案内を出して二、三日後にはいつも満員です。会員によって案内が手元に届くのに時間差があるため、何度申し込んでも空振りという方も出がちです。そこで、今後は受付申し込み開始日を定め、公平を期したいと思いますので、よろしくご協力願います。

新しいフロアマネジャーです



十月一日から、フロアマネジャーとして、川畑裕之が、事務局職員に加わりました。川畑は、東京生まれの二十六歳、すでに二歳になるかわいい坊やのパパです。これまで、配膳会社からアラスカへ派遣されて、クラブレストランや会員の方がたのパーティーで、サービスを担当していました。クラブの仕事もよく分かっているので、秋山(旧姓)和子の退職後、手薄となっていたクラブの受付、宴会関係に即戦力として登場です。

これでクラブ職員のフロアマネジャーは、チーフの阿部のほか大山、小橋、そして川畑の四人態勢となります。よいサービスは利用者がつくるともいいます。その都度、お気づきの点をご指摘のうえ、よろしくご指導お願いします。

「研究会」いずれも好評	佐藤達郎	2
『とっておきの話』		1
『ワーキングプレス』		
日教組プレハブ大会	苅田 昌	4
大韓航空機撃墜事件	重村智計	5
『先月のクラブゲスト』		
『東京支社訪問』	福井新聞	6
研究会の手つけられない問題／会議報告		7
ビジョンボックス／囲碁の会／会合紹介		8
プロフィール		9
事務局から		10

黄色い公衆電話になりました

クラブの受付前のボックスの電話が、すべて黄色の公衆電話になりました。これまで黄色は一台だけで、あとは赤電話が二台、青電話が一台でした。報道の基地としての当クラブの性格を考慮して、ぜひ、災害時に強い黄色の公衆電話に代えてほしいと、電々公社にお願ひし、実現したものです。

また、レストラン側のゾーンにも二台の公衆電話があり、一台は青電話でしたが、これも同時に黄色に代わりました。

「カードが使える電話を」との会員の声もあり、これも要望してみました。生産台数の関係で早急には実現が難しく、将来の宿題ということになりました。

会員の著書

大平洋時代 斎藤鎮男  
戦後日本外交史 I 石丸和人  
分割統治 比例代表制導入後の日本政治 共著 飯塚繁太郎、高橋祥起ほか

寄贈書

IN QUEST OF NUCLEAR DISARMAMENT

朝日新聞社・朝日イブニングニュース社

ゲスト・カード

第五回欧州記者研修Ⅱ プラ  
ンス・ダイクストラ (オランダ トロウ紙) ウルコ・デイルク・ヨンケル (オランダ ウット・フィナンシエール・ダフブラッド紙) ル  
チオ・レアンテ (イタリア イル・モンド紙)  
9月16日/モクタール・ルビ  
ス アジア新聞財団専務理事 (インドネシア)

展覧会の招待券

左記の展覧会、美術展の招待券をご恵贈いただきました。

西村五雲展/金剛家能楽秘宝展/近代洋画の歩み展 (朝日新聞社)

訂正 九月十日発行の第一六三号会報『とっておきの話』中、「吉福旅館」とあるのは「吉富旅館」の誤りでした。おわびして訂正いたします。

十月の行事

- 18日(火) 正午～2時 石橋政嗣社会党委員長昼食会 クラブ宴会場
- 21日(金) 午後0時30分～2時30分 前川春雄日本銀行総裁昼食会 クラブ宴会場
- 25日(火) 正午～2時 松下康雄大蔵省事務次官昼食会 クラブ宴会場
- 27日(木) 午後1時30分～3時 堀和雄警察庁薬物対策室長講演会 クラブ記者会見室

会報委員長 深谷憲一

- 委員 桂敬一 井出新六 斎藤吉史 安延久夫
- 連絡 長谷川 河野(事務局) 五〇三一二七二一